滝藤満義著

国木田独歩論

日本の近代作家

3

塙書房

滝藤満義（たきとう・みつよし）

略　歴

1944年　愛知県に生れる。
1966年　名古屋大学文学部卒業。
1973年　東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。
現　在　横浜国立大学助教授。

主要論文

「『春』の方法」（『国語と国文学』昭59・2）
「花圃と一葉—初期一葉ノート Ⅰ—」（『横浜国立大学人文紀要』第31輯，昭59・10）

国木田独歩論　日本の近代作家 3

1986年5月30日　初版1刷

著　者　滝藤満義
発行　白石静男

発行所　塙書房
〒113　東京都文京区本郷6丁目8-16
電話東京 03 (812) 5821
振替東京 0-8782

太洋社・美修堂斉藤印刷・弘伸製本

（分）3391（製）——（出）6940　落丁本・乱丁本はお取り替え致します。

目

次

I

シンセリティー論 I ……9
——「欺かざるの記」起筆前後——
シンセリティー論 II ……37
——文学者独歩の成立——

II

二つの「たき火」……67
——詩から散文へ——
「武蔵野」と「源おぢ」……99
小民たちの孤影……132
——「忘れえぬ人々」論——
喫驚(びっくり)したいということ……163
——「牛肉と馬鈴薯」論——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

様々な帰郷……196
——「帰去来」「河霧」「酒中日記」——
自助的人間像への哀別……253
——「非凡なる凡人」論——
「春の鳥」の夢……289
「竹の木戸」周辺……314

Ⅲ

独歩と自然主義……345
——田山花袋にふれて——
藤村と独歩……375
——藤村における「誠実」の問題——
所収論文初出一覧……415
あとがき……417

国木田独歩論

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

シンセリティー論 I

――「欺かざるの記」起筆前後――

一

不思議なる哉。渠が二十日に足らぬ「実際」は何時の間にやら感情までも「新聞記者たる職業」を是認するに至りぬ。是れ渠の進歩か、堕落か。進歩と云ふ勿れ。堕落とも言ふ勿れ。渠は決して「絶体の自由」を有せざるなり。渠が四五ヶ月以前に、一度び熱昂せる大インスピレーションは、固より非常なる結果を渠の精神生命の上に及ぼしぬ。乍去、ア、今日は渠の胸裡已に当時の猛火なし。

右は起筆されて間もないころの「欺かざるの記」、明治二十六年二月二十一日の記事である。「二十日に足らぬ『実際』」とは、自由社入社による独歩の始めての実社会体験であり、それは彼から「絶体の自由」を奪ってしまったという。「進歩」か「堕落」かに関する判断の留保にもかかわらず、既に転落の悲鳴は行間にあふれている。ここに彼の思い起すのは、「四五ヶ月以

前に、一度び熱昂せる大インスピレーション」であった。「四五ヶ月以前」、即ち明治二十五年秋ころの「大インスピレーション」は、「絶体の自由」を彼に許したものであったか、ともかくこの事実に関する記事が、「欺かざるの記」の初期にしばしば見受けられる。

たとえば、「九ヶ月の以前カーライルに由て初めて電の如く云々」とか、「彼の二三ヶ月の時の如き大直覚、大熱心」（明26・5・30）[1]とかがそれであり、また、「吾が去年九月の感激」（明26・6・28）もこの事実をさしたものにほかならない。これらの記事は、明治二十五年秋の二三か月に、いわばインスピレーション体験とでも呼ぶべきものが、独歩に起ったことを推測せしめる。この推測の下に、以下、いわゆるインスピレーション体験の彼にもたらしたもの、その内実とその変貌とを、彼の青年期を通じて追ってみようというのが当面のもくろみである。

明治二十五年の独歩を語る資料は少ない。この年六月、再上京を果した彼は、東京専門学校時代の友人や、先の上京の折親しくなっていた民友社社員らと交わり、『青年文学』の編集などに関係するほかは、もっぱら教会通いや読書三昧に日を消していたようである。「明治廿四年日記」にうかがわれるような、行動の先走った前年の彼とは対照的な姿をここにみることができる。始めて、読書の楽しみという「宝」を得た彼は、この間に、カーライルの「英雄論」、王陽明の詩、「新約聖書」、ワーズワスの詩、等々を読み得たのであった（明26・3・18）。因に、独歩がマクミラン版のワーズワス詩集を手に入れたのは、この年九月二十一日のことであったと思われる。[2]

「大インスピレーション」は、このような生活の中に生じた。

明治二十五年秋のインスピレーション体験は、独歩の用語に従えば、彼に「愛と誠と労働の真理」の感得をもたらした。

この真理の感得は、たとえば「痛言悲歌」(『青年文学』明25・8)のような民友子流の慷慨文――いわば「英雄流の作」――に身をゆだねていた彼の批評精神に、確固たる拠点を与える。彼にとっては、「如何に生く可き乎 (how to live) 之れ最初の問題にして最後の問題」であった。そして、その答えは既に用意されており、それはキリストの教える如く、「天の神を信じて御国を求むる」こと以外にはなかった。このような信仰の下、「吾が短かく亦た憐なる一生を神に捧ぐ可き」の「働」を尽すことによって、厭世者流の求め得られない「安心立命」が得られる筈であった。「社会的」に毒され、「功名」を求めるところにこの安心立命は得られない。人は「真大人真英雄」の如く、「真の人間」、即ち「神の国民」たらんと努め、「誠」を尽すことが肝要であった(田村三治宛書簡、明25・9・22)。

つまり、「愛と誠と労働の真理」の感得即実践が、永遠につながる唯一の道であると彼には思われたのである。この信念が「民友記者徳富猪一郎氏」(『青年文学』明25・10)、「田家文学とは何ぞ」(同、明25・11)における蘇峰批判、湖処子批判を可能にしたのである。

二

「民友記者徳富猪一郎氏」は、いわば独歩の蘇峰に対する独立宣言であった。少なくともその第一声であった。

独歩が蘇峰と相識るのは、日記により明らかなように、明治二十四年一月十八日、青年文学会の席上であったが、彼がそれより早く、『国民之友』の万余の愛読者の一人として、蘇峰に心酔した経験を持ったことは確かである。既に彼は明治二十一年二月、前年の八月に、民友社の人見一太郎によって組織された日本青年協会に入会しているし、同じく民友社系の青年文学会には、明治二十三年十月の創立当初から、発起人として参加したりして(3)、物理的にも蘇峰との距離を縮めていた。

日本青年協会の機関誌『青年思海』第八号（明21・3）に載った独歩の処女論文「群書ニ渉レ」は、このころの彼が、蘇峰の忠実な生徒であったことを如実に示している。ここで彼は、自由民権運動にかりたてられていった一世代前の青年達を批判し、「過去ノ青年ハ泰西的ノ目的ヲ為スニ、泰西的ノ理論ト歴史トヲ知ラズシテ過チタリ」と述べ、将来の日本は「泰西的」とならざるを得ない故、「現今ノ青年」、特に将来政界に身を委ねんとしている青年は、今のうちに「泰西的

ノ群書」を渉猟して、確固たる理論と歴史の知識とを身につけなければならないと主張する。その自由民権運動批判を行う主体の無痛性といい、欧化への楽天的信仰といい、まだ政治主義がふっきれていないとはいえ、これが蘇峰の「新日本之青年」以下の諸論の祖述であることは明らかであろう。

明治二十年代初期における蘇峰の評論活動が青年達に与えた意味の一つは、彼が、政治主義に代る経済主義をおし立てて、「生産」と「富」の社会たる「平民社会」の理想を描き、進退に窮していた青年のアンビションに新たな通路を開いたことにあると考えていいであろう。

独歩の「アンビション（野望論）」（『女学雑誌』明22・12・14）は、しかし、蘇峰の主張とは微妙なずれをみせる。ここでは、「群書ニ渉レ」において主張した「泰西的ノ理論ト歴史」の考究は、「歴史、伝記の変読」「欧州十九世紀のアンビション界」などの否定的言辞によってうやむやにされ、むしろ「維新大変革の歴史」の読書から得た「真」を批判のよりどころとして、彼は現今の日本の社会に横溢するアンビションを否定しようとする。独歩の批難は、政治的アンビションにのみ向けられているかにみえて、実はそうではない。「真」を批判のよりどころとする倫理性は、彼の意識するとしないとにかかわらず、必然的に、彼をアンビションそのものの否定へといざなうであろう。「一種の己れ自らさへ明白に認め得ざる煩悩」が他人事でないことを自覚する主体にとって、ことは政治から経済へというアンビションの転轍で済むほど単純ではない。

なお、このころから彼の教会通いが始まることは注目しておいていいであろう。そこには「将来への否定」[4]を促す植村正久がいた。独歩が植村によって洗礼を受けるのはそれより一年後、明治二十四年一月四日、吉田松陰に熱中していたころである。

しかし独歩が、今述べたような微妙だが決定的な蘇峰との距離を、面識の成った当時明確に認識していたとは思われない。「明治ノ青年」の輝けるリーダーとして、ジャーナリズムの世界ではなばなしい成功を収めている蘇峰自体、強烈な誘惑であった。その誘惑に魅せられるのが、自らの何に由来するのかを見極めるほどに、というよりそれを自問するほどに、独歩の目は澄んでいなかった。彼はしきりと蘇峰との接触を求め、蘇峰を自分ひとりの偶像とみるまでに心酔するのである（明24・2・21参照）。早くも「明治の青年と保守党」（『国民之友』明24・5・3）、「心理的老翁」（同、明24・5・13）等で、「明治ノ青年」の堕落をののしる立場に回っていた、いわばその評論活動における最初の敗北を味わわされていた蘇峰の口調そのままに、独歩は同世代の青年に「いく地な」しの罵声をあびせることができたのであった（明24・6・24）。

「民友記者徳富猪一郎氏」は先ず蘇峰の功績の評価から始まる。独歩の評価する蘇峰は、そのトレードマークたる「平民主義」においてであった。しかし、平民主義はすこぶるあいまいな「新標幟」で、おそらく蘇峰自身すら、その定義はできないだろうと独歩は言う。が、彼はそのあいまい性を突いて蘇峰批判に転ずることなく、「全国民之友より帰納し」て、そこに「或者」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com